

大正十四年（一九二五）  
絹本着色  
本紙各一七三・一×七二・二



結城素明（一八七五～一九五七）は、東京美術学校（現、東京藝術大学）で日本画、西洋画を学び、各美術展に出品して活躍する一方、母校で教授として後進の指導に当たるなど、幅広い活躍と功績を遺した。明治末から大正初期にかけては、平福百穂らと結成した无声会を中心に、西洋風の写実を日本画に採り入れる必要性を唱え、さらに、吉川霊華、平福、鍋木清方、松岡映丘と共に、写実に基づきながらも装飾性を加味した作風を展開する金鈴社を結成して活動するなど、日本画の創造に積極的に取り組んだ。そして、大正十二年からは文部省留学生として約二年間、ヨーロッパに滞在し、ブリューゲルやボナールといった後期印象派の作品に親しんだ。帰国後は、一層、その作域が広がる。墨に淡彩を加えた写実的な中にも情感溢れる南画的な作品、セザンヌやピカソを思わせる大胆な色彩面で画面を創り上げた西洋近代画的な作品、大和絵的な強く鮮やかな色彩感を写実的な画面に生かした作品等、優れたデッサン力と様々な高度な描写技法を駆使した幅広い作風の作品を制作している。美術評論家の小池賢博は、素明について「博学多趣味で、多才多能で実に行くところ不可ならざるなまき人であった」と記されている（特別展「結城疎明―その人と芸術―」、山種美術館、昭和六十年）が、この言葉は、素明のその優れた人物像、画才を端的に示している。

本作は、ヨーロッパから帰国した直後の作品かと思われる。大正十五年五月に大婚二十五年を迎えられる大正天皇と貞明皇后に、お祝いの品として内閣総理大臣をはじめとする国務大臣一同より贈られた作品である。「桐に鳳凰」という伝統的で格式高い画題を、西欧で刺激を受けた素明は、このような斬新でモダンな作品に仕上げた。マチスの色画による構成主義やピカソのキュビズムの影響を受けているのであろうか。伝統的な顔料を主体として、色彩の濃淡を丁寧に描き入れ、確かな筆致を見せている。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

1920s-30s モダン・エイジ — 光と影の造型美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 70

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十七年九月十二日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shozokan